

「常識」を疑おう

熊本産科婦人科学会

会長 近藤 英治



新年は雲ひとつない晴天で幕を開けました。この熊本の青空は、長年住む先生方にとっては見慣れた日常の風景かもしれませんが。しかし、京都から移り住んだ私は、毎朝目にするこの空の美しさに新鮮な感動を覚えます。Duke 大学での留学時代にも、異国の濃い青空と乾燥した空気に心を動かされました。孤独や不安を感じながらも、自分の未知の可能性を信じて挑戦し続けた日々が、今の私の大きな糧となっています。時に新しい環境に飛び込むことは、自分の視野を広げ、「当たり前」だと

思っていた価値や魅力を見直す貴重なきっかけを与えてくれます。

医学研究の世界もまた、新しい視点や技術を取り入れることで急速に進化しています。かつてはウェットラボと動物実験が中心だった研究は、バイオインフォマティクスや人工知能の登場によって大きな変革を遂げています。2024年のノーベル化学賞が、人工知能を活用してタンパク質の立体構造を予測する画期的なツールを開発した研究者たちに授与されたことは、その象徴的な例です。こうした技術は、創薬や疾患メカニズム解明を加速させています。私たちの教室でも、シングルセル解析や時空間遺伝子発現解析といった先端的な技術を用いて未知の世界に挑むプロジェクトが進行中です。これらの手法は、個々の細胞レベルの遺伝子発現やエピゲノム状態を組織内の位置情報と結びつけて解析することを可能にし、我々にワクワクする瞬間をもたらしてくれます。もちろん、研究には試行錯誤や失敗がつきものです。心が折れるような経験も多々ありますが、夢を抱き努力を続けていると、素晴らしい景色が見れることもあります。若い先生には研究者だけが体験できる研究の楽しさを是非味わってほしいと思います。

次代を担う皆さんには、日頃から「常識」に縛られず、広い視野で臨床や研究に取り組むことをお勧めします。現場で生じる疑問や課題に対しては、基礎研究、臨床研究、ビッグデータ解析、バイオインフォマティクス、人工知能など多様なアプローチを用いて解決を目指すことができます。臨床現場でも、ただ症例を右から左に処理するのではなく、リサーチマインドを持ちながら診療に取り組みしましょう。ガイドラインや他人の意見を鵜呑みにするのではなく、自ら調べ、考え抜く力を養ってください。そのような姿勢の積み重ねが、やがて熊本から世界を驚かせる新たな知見の発信へと繋がることでしょう。皆さんが、未知への挑戦を恐れず、その先に広がる可能性を自ら切り拓いていかれることを心から期待しています。

(2025年 睦月)